

『神秘の島』を読む

市野 悠


2007年10月13日

アメリカの美点とは何だろうか？当事者には見えない本質も第三者の観察から明らかになるというのが道理というものだろうが、戦後の安直な追従、あるいはそれに反動する嫌悪・嘲りの感情によって、アメリカの本当の姿は私たちの前から隠されてしまっているように思う。しかし19世紀まで遡れば、世界がアメリカの発展を温かく見守っていた時期があったようで、たとえばベルヌによるこの本はフランスで1877年に出版されたのだが、初期のアメリカの姿をフランス世論がどのように捉えていたかを考える試金石になる*1。

ベルヌの作品はいずれもよく読まれているが、中でも『八十日間世界一周』『二年間の休暇』『海底二万海里』といった小説を知らぬ人はいまい。私も小学生のころ夢中で読んだ思い出がある。言うまでもなくベルヌは偉大な冒険作家である。比して『神秘の島』の知名度は落ちる。児童書としては内容が地味で、大人になってからあえてベルヌを読み直そうとは思わないのがその原因だろう。ところが院試前の暇にかまけて実家にあった福音館の「古典童話シリーズ」を読み返してみると、児童文学もバカにしたものではないことに気がついた。中でもこの本に関してはアメリカ人・アメリカ文明の分析という観点から、子供時代とは異なる視点から読むことができることをこれから指摘したいと思う。ただし『神秘の島』の読み方としては非常に一面的であることも注意しておきたい。いくらでも批判的な読み方はできるだろうし、私自身ベルヌ文学の限界は明らかだと思っているが、近年にはない「素朴な」文学の

「素朴な」解釈としておおらかに眺めていただきたい。それはまたベルヌを子供の心で読むという本来のあり方を尊重するということでもある。

なお、前年の書評記事とは性質として全く違い、具体的部分を引用してウラをとるような書き方はしていない（作業としては行ったが、あえて抜き書きする価値があるとは思わなかった）。あくまで読みのアイディアを提示してあるにすぎないこの記事を鵜呑みにせず、実物を読み返すきっかけにいただければ幸いである。



話は南北戦争最終段階の1865年にはじまる。ベルヌは間違いなく現実世界の動向に精通していたことが他の作品からも窺われるが、この作に関しても同様である。南北戦争の結果はもちろんだが、それ以前のアメリカ建国史の知識もふまえて書かれていることに注目すべきだろう。五人のアメリカ生まれアメリカ人が嵐の中、気球で太平洋上を彷徨うことになった経緯で面白いのは、南軍の拠点リッチモンドからの脱走が肉体的苦役を理由とせず、むしろ不自由から来る精神的閉塞感によるものだったということだ。さらにこの移動中に彼らは荷物を何もかも捨てる羽目になるが、最後にはゴンドラという「容器」も放棄している。これをピューリタンたちがイギリスから移住して生活をはじめた過程と対応させたり、あるいはもっと広い文脈で考えてみると面白いのではないだろうか*2。

*1 それはプロの学者が実際に訪問することによって獲得したアメリカ観 [2]（原著出版は1835年）ともある範囲においては一致している。

*2 以下でもアメリカの歴史との対応を指摘することになるが、それに満足してもらうことが本記事の目指すところではない。文学とか歴史の読み方として、個々の事例にとらわれないほうが楽しいし実用的だろうから、自分の生

いずれにせよ脱走は成功した。彼らは思いがけず無人の孤島に到着し、まるでアメリカ開拓の歴史を辿るかのような生活をはじめ。しかし無人島を題材に書かれた他の作品と比べて明らかな違いに読者は気付くであろう。

- あらかじめ与えられた文明物資が極端に少ないこと
- 複数の人間が登場すること
- 五人中四人は精神的にも肉体的にも発達しきった段階にあること

第一の特徴によって、物語を貫くアメリカ開拓精神とでもいうものが最大限引き出されるし、第二の特徴からは集団（小社会と言ったほうがいいかもしれない）としての安定感が生まれる。そして第三の特徴が最も大切で、極端に健康的かつ協力的な相互作用が生み出される。読者は彼らの命運について何の心配をする必要があろうか。



冒頭の人物描写の力強さにいきなり圧倒される。指導的立場にあるサイラス・スミスは圧倒的な科学技術の知識を持っている。自分の手と直結した科学技術は、到底私たち現代人が個人として及ぶところではない。あらゆる日常的要求に「potentially possible」と答えられる彼はまさに全人格的尊敬を受けて然るべきエンジニアと言えよう。しかし彼は単なる開拓者の見本だろうか？それだけでなく、アメリカ建国時の偉大な指導者たち（彼らこそ弱者の国をまとめあげた立役者であった）のイメージもベルヌは重ね合わせていることが所々から示唆される。学識に基づいた自信と冷静さは庶民に見られるものではなく、一種の貴族的オーラと言ってもよいだろう^{*3}。

活とか現在の社会状態と対比することこそ読者のすべき作業だと思う。

^{*3} たとえば、フェデラル派の流れを汲んで起草された連邦憲法が、よき貴族政治をも念頭においていたという例を挙げることができるだろう。ベルヌの中にあつたサイラス像は、B. Franklin をはじめとして、T. Jefferson, G. Washington などに見出すことができるように思う。

ところで第二の指導者：ジュデオン・スピレットは、物語における実用的見地からすれば最も重要性の低い控え目な人物と思われるかもしれない。しかし彼の雰囲気をはじめから明確に解説することによって、読者に決定的な印象を植え付けることにベルヌは成功している。さらに精巧な挿絵が加わることによって、スピレットの姿は完全に読者の脳裏に焼き付けられるだろう。指導者サイラスに助言し警告するのは彼だけだが、知的市民と指導者とが有機的対話を行う情景はアメリカを理解するための重要な要素だろう。

また、少年ハーバートは明らかに未来のサイラスあるいはスピレットである。皆に非常な愛情を与えられ、それに応えるかのように知識と技術を吸収していく彼はまさにアメリカの継続的な力を象徴している。

それ以下は明らかな階級構造がある。ハーバートの従者的立場にあるペックロフ、サイラスの召使であった自由黒人ナブ、そしてオランウータンのジュップにいたっては現実味もなくなっていくが、これを前提として認めるところも当時のアメリカの世情と一致している。リンカーンが奴隷解放を唱えた背景にあつた思想は「人道的に奴隷制度は許されるものではないが、彼らが白色人種と同一の身分を有することは到底認められない」というものであつた。これはそのままベルヌの思想：帝国主義の自前論理とも一致している^{*4}。しかしこの紹介文ではそういう留保には目をつぶろう。ここで注目すべきは階級制度を超えた信頼関係が成立していることである。サイラスがトリッキーな方法で火を起こせてみせた日から市民ペックロフの信頼は一切揺るがない^{*5}また、サイラスも「最後には皆の協力が得られるはずだ」と信じて提言をすることができる。[2]

^{*4} 19世紀当時の標準的フランス世論が帝国主義を正当化・支持していた論理がベルヌの数多くの作品にも反映されている、というのが[4]の主張である。スピレットが「島から（有害な）ジャガーを一掃してしまおう」という考えをもっているところにもこれは露骨に表れている。

^{*5} 通常なら卑屈さが出てしまうところで尊敬だけを描くのは大衆作家ベルヌのなせる業であるが、それはそれで（特に現代においては）有効な手法だと評価したい。

の言葉を借りれば「すべての人が背伸びをして目的を達するまで努力」するのである。実は五人そろっての会話場面はそれほど多くないのだが、自分の考えを思い思いに語り合う空気は原色を散りばめた美しい絵画に通じるものである*6。お互いにとってこれほど暮らしやすい社会、集団であることのメリットがそのまま生かされる社会が形成されていく様子は純粋に気持ちのいいものだと言いたい。最終的に「モノの世界」が崩れ去るわけだが、リンカーン島で生まれた「絆の世界」は最後まで残っている*7。

最後に一応全体の流れを俯瞰してみよう。第I部は彼らが何とか生活環境を確立させるまでの話、第II部は長期滞在・永住を見据えての文明化の試み、そして第III部では度重なる困難が彼らを襲い、最終的には自然の力によって島は崩壊する。後半部には連作とされる『グラント船長の子どもたち』と『海底二万海里』のストーリーがオーバーラップするが、これには商業的意図が感じられるので、文学的にはさほど重視する必要もないだろう。題名である「神秘」じたいにも表面的な意味しかない、というのが私の判断だ（神秘主義が裏にあるとも読めるが、これは私の関知するところではない）。しかし後半部から読み取るべきメッセージとして重要そうなのは、危機に直面して神秘の力に大きく依存しはじめた生活に不安を感じるようになったサイラスに、

ところで、人間は社会の中においてこそ補いあって、完全なものとなる。人間にはそれぞれ他人が必要なのだ。サイラスはこのことをよく承知していた。そのため、ときどき彼は、自分たちの力だけではどうにもならない状況にいつか直

*6 感覚的な話になるが、ヨーロッパが繊細な混色の世界とすれば、原色の鮮やかさを前面に押し出すアメリカというのが私の抱いているイメージである。倒錯した混色にせよ力を手にした原色にせよ、一色に染まってしまうのが最も危険な事態だが。

*7 そこに幻想的友愛は感じられない。もっと実用的・現実的なつながりである。

面するのではなかろうか、という想いとらわれるのだった。(第III部VIII章)

という真の冷静さが生まれ、ひとつ上の段階に到達するところだろうか。が、後に続く部分からは、こだわらないアメリカ人の方向転換の速さを感じられる。この「軽さ」を前にして、分析的な読みには限界を感じてしまった。アメリカ本土に広大な土地を購入して幸せに暮らす、というハッピーエンドに満足できるはずもないが、これはベルヌという作家の軽さでもある。

この記事は、これからアメリカに旅立つすべての人に捧げる。

市野 悠

京都大学理学部4年(非線形動力学研究室配属)

web: <http://freeshells.ch/%7Ejuno/>

mail: yu.ichino@gmail.com

参考文献

- [1] Jules Verne (著), 清水 正和 (訳), 『神秘の島』(福音館書店, 1978).
- [2] Alexis de Tocqueville (著), 松本 礼二 (訳), 『アメリカのデモクラシー』(岩波書店, 2005).
- [3] 紀平 英作 (編), 『アメリカ史』(山川出版社, 1999).
- [4] 杉本 淑彦, 『文明の帝国主義』(山川出版社, 1995).